

Title	「四書字引」とその周辺
Sub Title	"Shisho-jubiki" : bibliographical study on small dictionaries for the four Chinese classics
Author	関場, 武 (Sekiba, Takeshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2006
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.91, No.1 (2006. 12) ,p.240(33)- 272(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	関場武教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00910001-0272

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「四書字引」とその周辺

関場 武

かつて小生は「三田文学」の「私の独り言」に「中途半端」と題する学術的随想をものしたことがある。そこでは、春本化した節用類を2、3、肝心な個所の図版も示さず中途半端に紹介したが、来し方を振り返ってみると、小生の研究報告は、中途半端なものが大半であった。アカハラ・パワハラを受けて辞書の世界に逃げ込んだのは、却ってよかったのだが、閲覧・複写・資金等の研究環境のほか、時間的な制約があまりにも大きく、結局自分の手の届く範囲での原本調査・資料蒐集に終始する破目になってしまったのである。今回の論考もそれ。この1月に丸善で開催された慶應義塾図書館貴重書展示会「論語の世界」を機に、これまでのものを寄せてみようと思ったのがその発端であるが、なんとももどかしいものとなってしまった。明治期のものについては、国立国会図書館蔵本が山田忠雄氏監修のもとマイクロフィルム版として出ており、同氏の「近代國語辭書の歩み その模倣と創意と」上（昭和56年7月）でも触れておられるが、ここでは、小生が実見出来たものに限った。辞書の世界も近年「完べき」を謳うものが出ているが、辞書・事典に完璧などというものはあり得ない。それを思えば辞書に関するこの報告も致し方無きものとすべきか。これまで、また、今後も様々にお世話になるであろう各位に感謝の念を奉げつつ、中間報告として本稿を提出申し上げる。

I

江戸時代に入って、印刷出版が盛んになると、様々な辞書・字典類も次々と刊行されて行く。江戸時代の前期に限ってみると、まず「節用集」という用字・用語辞典が最も多く刷を重ね、検索・配列法等に改良の工夫もなされている。そして、「節用集」収載語彙の基になった「下学集」、それに、中国の「玉篇」や「字彙」を追って和風にしたもの、たとえば前者に関しては「倭玉篇」の類が、「大廣益會玉篇」の付訓版とともに盛んに出ている。また、あの源順の「倭名類聚鈔」が信頼を勝ち得て、古活字版以下版を重ねて行く。そういった状況のなか、元禄時代の前半に登場したのが、今回取り上げた「四書字引」「五経字引」という、特定の文献、特定のテーマに関する袖珍判の字書類である。

もちろん、それまでに、和歌・連歌、俳諧の語彙集や辞典：例えば「匠材集」「藻塩草」「詞林三知抄」「はなひ草」「便船集」「誹諧類船集」、詩作のための韻引き字典「聚分韻略」やそれから派生した「伊呂波韻」、本草・薬学関係の字書・辞典類：例えば「本草薬名備考」「薬種新製剂記」「病論俗解集」「和名集并異名製剂記」など、テーマ別のものが無かったわけではない。が、しかし、「聚分韻略」(三重韻)を別格として、単独で、それらよりはるかに多くの版を重ね、明治中期に至るまで利用されて行ったものが「四書字引」であり「五経字引」である。四書については元禄6(1693)年刊のもの、五経に関しては同8年のものが、管見では古い。そして、それに刺激を受けてか、後に「春秋左傳字引」(宝暦13<1763>年刊)や、「唐詩選字引」(延享2<1745>年版アリ)のほか、「經書字辨」(元禄11年刊)といった、俗解書的なものも出ている。

また、一方、四書五経の他、古文真宝・三体詩等、当時よく読まれていた詩文集に関する字書を、合本形式で一書にまとめたものも出現する。「〈新板増補〉讀書字引大全」(享保19<1734>年版、明和5<1768>年求版本アリ)がそれである。同書は、「大廣正孝經字引」「古文前集後集・三体詩・錦繡段字引」「小學字引」「増益四書字引大成」「大廣五経字引大成」

といった7点の字引を合本にしたもので、全212丁。何セタテ11.2、ヨコ7.9センチといった通常の木版印刷小型判であるため、情報の収容能力は高が知れているが、当時にあつては有用な字書であつたと思われる。そして、それ以降も、四書字引は、「大廣正四書全文字引」享保20(1735)年重刊、「増益四書字引大成」宝暦13(1763)年刊、「校正四書字引大成」天明2(1782)年、「古註新註」大成四書字引」寛政8(1796)年改刻、「改正四書字引」天保8(1837)年といった具合に、次々と開板されて行く。その多くは、袖珍本30丁~40丁、有界5、6行・5または7段組といったもので、収録字数は少ないが、出版度数、残存本の疲れた様子を見ると、とにかく利用されたようである。あるいは、四書の素読・披見に悩み、藁にもすがるといふ心境であつたのではとも考えられる。

ただ、たとえば明治3(1869)年新刻の「新撰校訂四書字引大成」でも、増補されたとはいへ見出し字は計2489字で、附訓も多いわけではないので、利用者にとって実際どの程度有難かつたのかは不明。但し、論語などは、原文の字数が多くないので、それなりの効用があつたのかもしれない。いずれにしても情報量の少なさは幕末の横本、明治期の銅版本でも同じ。安政5(1858)年には字引付の「四書」が大阪の積玉圃河内屋喜兵衛から出ており、各冊の末毎に字引を付している点で親切な試みではあるが、やはり、収録字数も音訓もとても満足出来るものではない。となると、文化10(1813)年に出た甲斐蜂城著「四書字引捷經」中本1冊のように、四書の本文順にしたがって字句を抽出し音訓を付けて行く方式のほうが良いということにもなり、西山柳太郎編「四書字解」(明治12年刊)、佐野元恭編「く頭書圖彙く四書字引大全」(同14年刊)、宮島純熙編「く頭書畧解く四書字類大全」(同17年刊)といった、「字引」を謳つてはいるが実質は本文順の字句注釈書であるもののそれなりの有用性が認められ、江戸時代から続いて来た「四書字引」の類は、姿を消していったものと思われる。

以下、実見出来たものを中心に、調査の結果を恣意的に記す。書名の同じものを刊行年代順に挙げたが、その際、書名等の角書は〈 〉で括り、振り仮名は()に入れ、書肆・著作者等の住所も、明治期のものは都市

名だけに止めた。また、訓点も省略に従った。諒承せられたい。

II

山田忠雄氏目録「(漢和辞典の成立) 附録・本邦辞書史概説附表一金玉篇から漢和辞典へ」(『国語学』39<昭和34年12月>)によると、元禄6(1693)年版の「小学字引・四書画引」袖珍本1冊がある由であるが、未見。

[A]

(1) <新板増補> 讀書字引大全

袖珍本1冊。(表紙) 苦色地紙に雷紋・唐草模様空押し、縦11.2、横8.1 糎。(題簽) 表紙左肩、子持ち枠付蒲色短冊形紙。「<□遺□誤> 讀書字引大全」。(封面) 子持ち枠内中央に題簽風に枠を作り書名「<新板増補> 讀書字引大全 完」と記し、その右に孝經字引、古文真寶<前集後集>字引、三體詩字引、錦繡段字引、左に四書字引、五經字引、小學字引と7篇の字引名を出し、末に「皇都書肆山岡壽徳堂梓刻」と記す。(内題)(尾題)は各篇毎にある。(刊記)終丁才匡郭内「干時/享保十九歲寅四月吉日/皇都書肆二条通寺町西江入町 山岡四郎兵衛梓刻」。(柱刻) 讀書字引序(孝、小目録、小、四目録、四、五目録、五)、下方に丁付。2番目の〔古三錦字引〕は柱に書名無し。



各篇の(題名)(丁数)等は次の通りである。序：1丁(末に「本朝書物朱引之歌」アリ)。大廣正孝經字引：9丁(尾題)大廣正孝經字引終。〔古文前集後集、三體詩、錦繡段字引〕：1(字引凡例) + 48丁、(尾題)

無し。小學字引：1（小學字引目録）＋36丁、（内題）（尾題）無し。増益四書字引大成：1（増益四書字引目録）＋39丁、（尾題）増益四書字引大成終。大廣五經字引大成：1（字畫）＋75丁、（尾題）大廣五經字引大成畢。

各篇とも每半葉有界5行7段。画引き。収録項目（字数）は、「大廣正孝經字引」533、「古三錦字引」3241（本文3213、末に「落字爰續」として追補が28字）、「小學字引」2422、「増益四書字引大成」2413、「大廣五經字引大成」3798字。

(2)〈増補改正〉讀書字引大全

袖珍本1冊。（封面）(1)享保版とは別様式。飾り枠内を縦に3ツ割りにし、中央に書名「〈増補改正〉讀書字引大全 完」、右に孝經～小學までの著作名（古文は前集・後集に分ける）を3行3段に出し、左に「浪華書林 菅生堂蔵版」と出す。（刊記）終丁匡郭内に「干時／明和五子年九月求版／大坂心齋橋筋 河内屋茂八板」とあり。因みに封面に言う菅生堂はすなわち河内屋茂八のことである。他は享保版に同じ。

目睹した一本には、本文末、刊記の前に「蔵板目録」（大阪心齋橋筋南久宝寺町・崇高堂河内屋八兵衛）が1丁分あり、讀書字引、四書字引、五經字引、孝經字引、小學字引、古三近字引、蒙求字引、小説字彙、詩語、詩則、唐詩絶句選の11点の内容案内付広告を載せる。本書「讀書字引」については「四書五經等ノ、部分シテ文字ヲアツムルコト甚多シ、常ノ字引ニモ用ユベシ」とあり、「古三近字引」については「古文前後集・三體詩・近思録ノ四部ヲ合冊ス 一冊」とある。「小説字彙」が天明4（1784）年5月出願、寛政3年（1791）版のそれ、「唐詩絶句選」が天明2年改題届のものであるとすると、管見に入った一本は明和5（1768）年よりやや後の発売のものということになる。

【B】

(1) 大廣正四書全文字引

袖珍本1冊。縦10.85、横7.55 糎。（内題）2ウに「（大廣正四書全文

字引) 羅山點」とあり。(刊記) 終丁オ本文左に飾り枠を挟んで「享保乙卯復月穀旦 辻柳陰子校正 京師・泉屋山口茂兵衛重刊」とあり。すなわち享保 20 (1735) 年 11 月の刊。(柱刻) 白口、オ上部に丁付 (初、二～卅二尾)、下部に「揚文軒」の軒号がある。揚文軒は刊記にある泉屋山口茂兵衛のことである。6 行 7 段、31 丁 (本文 2 ウから始まる)。(1 画) 一<イチ ヒトリ ハジメ>～(29 画) 鬱<ウツ>。*初丁ウ・2 オに擊蕤図と「學者須讀論孟」云々の勸学文アリ。なお、四書字引に於ける掲出字の画数の認定は、今日多くの漢和辞典で行われているものと異なる例が見られ、所属画数に出入りが生じている。

(2) 大廣正四書全文字引

朱色地紙に雷紋空押表紙。(題簽) 表紙左肩、単枠付。「四書字引」。(封面) 子持ち枠内を縦に 3 ツ割りにし、中央に「<新刊> 四書字引」と書名、右に「先版最足便用、然文字磨滅、故今亦上梓者也」の文、左に「皇都書林 鈴木卷香軒」と版元を出す。また、枠外上部に「天明板」と記す。(内題) 2 オ「大廣正四書全文字引」。(刊記) 終丁ウ本文末 2 行目以下に界線を置いて「天明二年壬寅七月吉日 江戸書林・西村源六 京都書林 諸宗御經類板元・鈴木半兵衛」と記し、さらに界線を置いて左に「大廣正四書全文字引畢」と(尾題)を出す。(扉) オ飾り枠内に「讀書之法、但反諸己驗其實得致其實用變化氣質、必有日新之功」とあり、ウに「程子曰、初學入德之門、無如大學、其他莫如語孟」云々の勸学文あり。6 行 7 段、31 丁。(丁付) 一～四十一。但し九は「九ノ十九」とある。

*享保 20 年版と比較すると、29 ウ (儲～獸)、30 オ (靡～贊) と続くべきところが、本書では 29 オ (靡～贊)、29 ウ (儲～獸) と逆になってしまっている。また、3 画《之》：[享保] シ、コレ、コヽ、ヲイテ、ユク、モト一 [天明] シ、コレ、コヽ、コクキ、コク、17 画《聲》：[享保] セイ、ヲト、ナ、失一、ナル一 [天明] セイ、フト、ナ、尖一、ナル、18 画《儲》：[享保] チヨ、一子、チヨ一 [天明] チヨ、一子の如く、細部に差異があり、天明版の方に誤りが多いようである。

(3) 大廣正四書全文字引

朱色地紙に万字つなぎ艶出し模様表紙。(題簽)表紙左肩、単枠付短冊形白紙に、上部に界線を置き丸の中に「字引」、その下に「全備四書本註」と書名を出す。(封面) 匡郭内右方に「四書字引 全」、界線を置いて左に「先版最足使用、然文字磨滅故、今亦上梓者也」と2行に記す。(内題)(2)に同。(刊記)後表紙見返し匡郭内に「寛政四歳壬子八月吉日/武江書肆・若林清兵衛、前川六左衛門合版」とあり。(尾題)終丁ウ匡郭内左方に界線を置き「四書集註字引巻終」と記す。上掲(2)と同じく丁付・丁の乱れがある。また、《之》：シ、コレ、コハ、ヲイテ、コク、《聲》：セイ、ナ、犬一、ナル等の異同がある。

(4) 大廣正四書全文字引

縹色無地表紙。(封面)子持ち枠内を界線で縦に3ツ割りにし、中央に「〔新刊〕四書字引」、右に「先版最足使用、然文字磨滅故今亦上梓者也」、左に「皇都書林 鈴木卷香軒」と記す。また、匡郭外上部に「享和板」と記す。扉・内題・丁付・尾題等、天明2年版に同じ。(刊記)「享和三年亥七月吉日 江戸書林・西村源六 京都書林 諸宗御經類板元・鈴木半兵衛」。様式は(2)と同じ。すなわち天明版の刊記のうち「天明二」と「壬寅」の個所を入木により変えている。

* 版木は(2)天明2年版のものを流用している。

(5) 大廣正四書全文字引

表紙・封面・内題等、寛政4年版と同様式。但し新刻で、封面の「先版最足」云々の部分が「使用」から「便用」に改められ、これまでの版に見られた丁付「九ノ十九」の乱れも訂正されている。(刊記)後表紙見返し匡郭内に「文化七年正月改之 武江書肆 若林清兵衛・前川六左衛門合刻」とあり。(尾題)「四書集註字引終」。6行7段、32丁。

(6) 大廣正四書全文字引

香色無地表紙。(題簽)表紙左肩、単枠付短冊形白紙。「改正四書字引」。封面・扉・刊記無し。内題・尾題・丁付等、(5)と同様式。6行7段、30丁。

(7) 〈イ〉大廣正四書全文字引

表紙：紫色無地紙。(題簽)表紙左肩、子持ち枠付短冊形白紙。「四書字引」。(封面)匡郭を縦に3ツ割りにし中央に「四書字引 全」、右に「文政十年丁亥改版」、左に「先版最足便用」云々の字句。(刊記)管見のものには無し。(尾題)「四書集註字引卷終」。6行7段、31丁。九ノ十九の丁付の乱れあり。

(7) 〈ロ〉大廣正四書全文字引

表紙：灰青色無地紙。封面・本文は〈イ〉本と同様式であるが、別版である。丁付の乱れは訂正されている。(尾題)「四書集註字引終」。6行7段、30丁。

(8) 大廣正四書全文字引

表紙：青緑色地紙に紗綾形模様空押し。(刊記)後表紙見返し匡郭内に「寛政四歳壬子八月吉日／弘化三午再刻／武江書肆 若林清兵衛／前川六左衛門／森屋治郎兵衛板」と記す。すなわち(3)の寛政4年版に基づくもので、封面の様式・字句、丁付の乱れ等も同じである。但し項目の各字に付された音や訓等には小異がある。(尾題)「四書集註字引卷終」。6行7段、31丁。

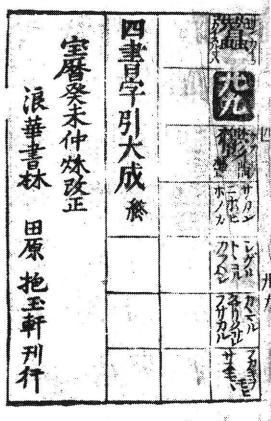
【C】

(1) 増益四書字引大成

表紙：灰色地紙に雷紋艶出し。外題：剥落のため未詳。(目録題)「増益四書字引目録」。(内題)「増益四書字引大成」。(刊記)終丁ウ本文末に界線を置き左に「宝曆癸未仲秋改正／浪華書林 田原抱玉軒刊行」とある。すなわち宝曆13(1763)年8月田原屋平兵衛の刊。(尾題)「四書字引大成終」。(柱刻)白口、上方に「四」、下方に丁付。丁付：一～卅九。5行7段、1(目録) + 39丁。

* 【B】本等と比べ訓が多いのが特徴。たとえば1画の「一」は、イツ、ヒトリモ、ヒトツノ、ヒトタビ、ヒトツニ、ハシメテ、12画の「爲」は、イ、タリ、ナス、スル、ナリ、シテ、タメニ、タラ、セヨ、タル、セ、一

ル、セン、セバ、セマク、ツク、マナビツクラ、ヲクリテ、ツクラント、ツクガ、ツクル、タレル寸、ヲコナフ、ヲサメテ、ヲサムルコト、マナシテ、タスケン、マナブナリ、タメナリ、一間シバラクモ、最終 29 画の「鬱」は、ウツ、一陶、鬱、サカン、ニホヒ、ホノカ、シゲル、ト、コル、カフハシ、カ、マル、クサリクサレ、フサカル、フカキヲモヒ、サスモ、とある。また 5 画「以」のように、



単独の音・訓の他、一下シモツカタ、一降シモツカタ、一來コノカタ、所一ヲモンミレバ、ユヘン等と、熟字訓を挙げている例も散見される。項目字数：2410。

(2) 増益四書字引大成

改装本 1 冊。目録題・内題：(1)に同じ。(刊記)後表紙見返し匡郭内に「干時/明和五子年九月求版/大坂心齋橋筋/河内屋茂八板」とあり。(尾題)「増益四書字引大成終」。5 行 7 段、1 (目録) + 39 丁 + 奥。

* (柱刻)に「讀書字引四」とあるように、【A】(2)明和版「讀書字引大全」の「増益四書字引大成」の部分具有独立させ、刊記は同書のそれを流用したもの。

(3) 増益四書字引大成

表紙：焦茶色布目地紙。(題簽)子持ち枠付、表紙左肩。「四書集註字引」。目録題・内題・尾題・柱刻：【C】(1)宝暦 13 年版に同じ。(刊記)宝暦版と同じ位置に「皇都書肆 河南四良右衛門」とのみあり、刊行年月不記。

(4) 増益四書字引大成

表紙：栗皮色地紙に万字つなぎ艶出し模様。(題簽)子持ち枠付短冊形黄紙。表紙左肩。「〈校正〉四書字引 全」。(封面)飾り枠内を重線で縦に

3ツ割り。中央に「〈校正〉四書字引 全」、右に「弘化三丙午歳正月再版」、左に「浪華書肆二書堂梓」。袋も同様式。(刊記) 後表紙見返し匡郭内に「弘化三丙午歳正月再版 大坂書林 大坂心齋橋通南久太郎町・秋田屋市兵衛、同 心齋橋通安堂寺町・秋田屋太右エ門」とあり。

* (柱刻)に「讀書字引四」とあるが、享保版・明和版「讀書字引大全」所収の「増益四書字引大成」や、前出(2)の明和単独版のそれとは、異版である。例えば註の位置・訓、字体等に異同があるほか、第18～21丁にかけて、丁の順序が異なる。本書18＝讀書19、19＝18、20＝21、本書21＝讀書20丁となっている。11畫と12畫が絡む所であるが、本書のほうが掲出順に齟齬を来たしている。また、21画の表示が、「讀書字引大全」は二十一となっているのに対し、本書では廿一となっている。すなわち「讀書字引」には上記【A】(1)、(2)の他に異版があったものと考えられる。

【D】

(1) 増補四書字引大成

表紙：縹色無地紙。(題簽) 子持ち梓付短冊形白紙。「改正四書字引」。(目録題)「増補四書字引目録」。(内題)「増補四書字引大成」。(刊記) 後表紙見返し匡郭内、「正徳四甲午曆／寛政二庚戌歳再校／浅草観音前／浅倉屋久兵衛」。(尾題)「増補四書字引大成終」。(柱刻) 下方に丁付のみ。5行7段、1 + 39丁 + 奥付。【C】(1) 宝暦13年版系の本文で、付訓が多い。

Ⅲ

【E】

(1) 〈古註新註〉大成四書字引

表紙：香色布目地紙。(題簽) 子持ち梓付短冊形白紙。「大成四書字引」。(内題) 2ウに「〈古註新註〉大成四書字引」。(刊記) 後表紙見返し匡郭内に「○本朝朱引ノ法ヲ知ル歌」(右所、中ハ人名、左官、中二ハ書名、左二ハ年號)があり、界線を置いて左に「原板 寶暦十一年十一月／再板

明和七年十一月／浪華書林柏原屋清右衛門、柏原屋佐兵衛」と記す。(尾題)「〈古註新註〉大成四書字引終」。(柱刻)上方に《、界線と○を置いて下方に丁付のみ。丁付：一～四十、5行7段、40丁。前見返し(1ウ)と2オに浪華・含英堂揆庭識の「凡例」

一、音或ハ訓、古註ニノミ用ルモノハ▲此印ヲ以テ分ツ、一、音義并清濁間誤り來ルモノハ改之、一、▲此印ナキハ古註新註通用モノ也、一、畫數ノ内、文字ヲ求ルニ、若不見トキハ、其畫ノ前後ヲ見ベシがある。(1画)一〜イツ、ヒトリモ、ヒトツ、ヒトタビ、ハジメテ、ヒトツノ)〜(36画)〔龍×3〕タフ、ユク。2404字。

(2) 〈古註新註〉大成四書字引

表紙：樺茶色無地紙。凡例・内題・尾題・柱刻・丁付・丁数(1)に同じ。(刊記)後表紙見返し匡郭内「●本朝朱引ノ法ヲ知ル歌」の左方に界線を置いて「新刻天明四年十一月／浪華書林 柏原屋清右衛門、柏原屋佐兵衛」と記す。

(3) 〈古註新註〉大成四書字引

表紙：濃縹色地紙に花菱模様空押し。内題・尾題は(1)(2)に同じ。(刊記)(2)と同じく朱引きの歌の左方に界線を置いて「寛政八年辰六月改刻／浪華書林 池内八兵衛」と記す。(1)(2)とは異版。「凡例」には含英堂揆庭の名が無く、末に「點畫究真偽或者國郡名ヲ分」の1条が入り全4条となっている。「凡例」および奥付には丁付け無く、二から始まり三十九に終わる。5行7段、40丁。

(4) 〈古註新註〉四書字引大成

表紙：濃縹色地紙に松皮菱模様空押し。内題・尾題(1)〜(3)に同じ。(刊記)後表紙匡郭内に「寛政三辛亥歳／九月吉辰／張府書林 風月孫助、菱屋小助、永楽屋東四郎」とあり。初丁オが扉風になっており、匡郭縦3ツ割りの中央に「〈古註新註〉四書字引」と書名、右に「一、音或ハ訓、古註ニノミ用ルモノハ▲、此印ヲ以テ分ツ」、左に「音義并清濁、間誤り來ルモノハ改之」と(1)の凡例のうちの初めの2条を載せる。丁付：一ノ二、三〜三十九。奥付には無し。5行7段、38丁+奥付。

(5) 〈古註新註〉大成四書字引

表紙：紫色無地紙。(題簽) 表紙左肩、子持ち粹付、「大成四書字引」。
目録・内題・尾題：(3)に同じ。(刊記) 後表紙見返し匡郭内に、右に○
本朝朱引ノ法ヲ知ル歌を出し界線を置いて左に、「天保八丁酉二月再刻/
心齋橋安土町角 大坂書林 河内屋儀助」と記す。(封面)に「浪華・含
英堂揆庭識」の「凡例」3ヶ条を載せる。丁付一〜四十、5行7段、39丁。

【F】

(1) 改正四書字引

袖珍本1冊。栗皮色地紙に紗綾形・梅花模様空押し表紙。縦12.5、横
9.1 糎。(題簽) 表紙左肩、単太粹付短冊形紫色紙。〔後藤改正〕四書字引
略註。(刊記) 後表紙見返し匡郭内。右に「經典讀法早指南 小本 全
出來」と広告を出し、界線を置いて左に「天保八丁酉年正月／書肆 江
戸・須原屋茂兵衛、同伊八、山城屋佐兵衛、和泉屋吉兵衛、岡田屋嘉七、
大阪・網屋茂兵衛、秋田屋太右衛門」と計7名の2都の書肆名を載せる。
(内題)「改正四書字引」、頭書に「拔萃略解」あり。尾題無し。(封面) 匡
郭内を界線で縦に3ツ割りにし、中央に「〈豎本〉四書字引大全」、書名
の右に

世ニ流布ノ四書字引ハ、誤字多クシテ惑ヒヤスシ、コレヲ改正ス○
又字ニヨリテヨミ癖アリ、故ニ大學ニテハ●、論語ハ▲

左に

孟子ハ✕、中庸ハ■ト印ヲ分ツテ詳ニ辨ズ、一文字ヲ引ニ出ガタキモ
ノハ、ソノ畫數ノ前後ヲ見テ搜索スベシ、定榮主人誌

と凡例的なものを載せる。定榮主人とは秋田屋太右衛門のことか。(柱刻)
上方に「要語拔萃」、魚尾を置いて下方に「四書畧註字引」の書名、丁付。
「拔萃略解」は9行で43ウまでであるが、柱刻の「要語拔萃」の表示は第
42丁までとなっている。6行5段、49丁+奥付。本文：画引(1画)一
〜(29画) 罫までの2428字、(拔萃略解)：イロハ順(イ) 異端〈イタ
ン〉セイジンノミチニソムキテ、ベツニ一家ヲナシ、ヲシヘヲタツルモノ

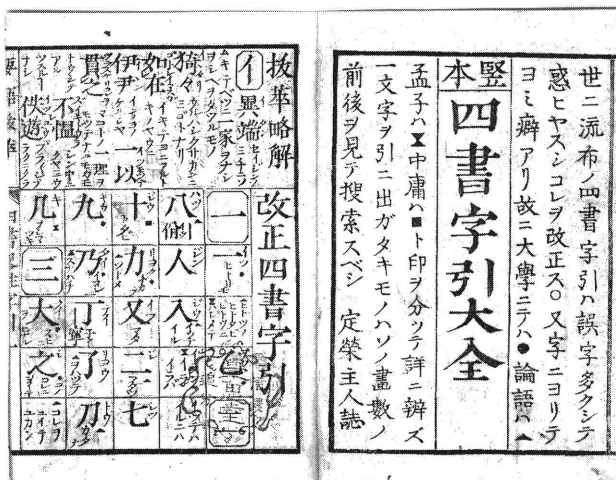
～(ス)足恭くスウキヤウスルヲ>ムシヤウニバカインギンニスルコトナリまでの 730 項。本書も付訓が多い。

(2) 改正四書字引

題簽の用紙が白紙であるほかは、表紙・内題・柱刻・丁付・丁数等 (1) に同じ。(刊記) 後表紙匡郭内に「天保九戊戌年初夏上旬發行／三都書林 京都・勝村治右衛門、大坂・秋田屋太右衛門、江戸・岡田屋嘉七、山城屋佐兵衛、英大助、全・須原屋伊八、須原屋佐助、須原屋茂兵衛」と記す。(封面) (1) と同様式であるが、書名は「<改正> 四書字引大全」。封面・奥付を除き (1) の天保 8 年版と同一版木を使用している。

(3) 改正四書字引

表紙：褐色地紙に紗綾形模様空押し。(刊記) 後表紙見返し匡郭内に「天保九戊戌初夏發行／嘉永四辛亥深秋再刻」と年記を出し、右に「三都書林 京都・勝村治右衛門、大坂・秋田屋太右衛門、江戸・岡田屋嘉七、山城屋佐兵衛、英屋大助、全・須原屋伊八、須原屋佐助、須原屋茂兵衛」の計 8 名の書肆を挙げる。(2) の天保 9 年版と同一書肆だが、英大助の表示が英屋大助となっている。(封面) は (1) (2) と同様式であるが、書名は (1) と同じ「<豎本> 四書字引大全」。その他前版に同じであるが、



頭書の「拔萃略解」（イ・異端～ス・足恭）は 8 行で終丁ウまでである。また、その部分に尾題「拔萃略解終」がある。本文は

[3 オ]（世祿、祿爵）＝嘉 4：世祿、祿爵＝天 8、9（匠人、伐氷之家）＝嘉：亡人、伐氷之家＝天 8、9

[15 オ]（内則〈ダイソク〉禮記ノヘンノ名ナリ＝嘉：〈タイソク〉礼記ノヘンノ名ナリ＝天 8、9

[21 ウ] 洋洋乎＝嘉：洋々乎＝天 8、9

[35 オ] 兢兢＝嘉：兢兢＝天 8、9

[38 ウ] 愉愉如＝嘉：愉々如＝天 8、9

の如く、天保 8 年、9 年版とは異なりを見せている。後述のように、本書の本文は安政版以下の基になっている。

(4) 改正四書字引

表紙：(3)に同じ。(題簽)黄紙。書名天保版に同じ。封面書名(3)に同じ。(刊記)「天保九年戊戌初夏發行／安政四年丁巳仲秋再刻／三都書林 京都・勝村治右衛門、大坂・秋田屋太右衛門、江戸・岡田屋嘉七、山城屋佐兵衛、英屋大助、全・須原屋伊八、須原屋佐助、須原屋茂兵衛」。すなわち書肆は(3)嘉永 4 年版に掲出順を含めて同じ。本書は(3)嘉永版の翻刻である。

(5) 改正四書字引

表紙：葡萄茶色地紙に紗綾形・花紋空押し。内題・柱刻・丁付・丁数・行段・封面等(4)に同じ。(刊記)後表紙見返し、匡郭内に「天保九戌初夏發行／文久三癸亥深秋再刻」の年記と、京・勝村治右衛門、大坂・秋田屋太右衛門、江戸・岡田屋嘉七～須原屋茂兵衛に至る「三都書林」を挙げる。この 8 名は(3)嘉永版(4)安政版に同じ。要するに嘉永版の刊記のうち、「嘉永四辛」の部分を取り「文久三癸」と入木しただけのものである。

本書と嘉永版、安政版の本文を「拔萃略解」で比べてみると、例えば

[10 ウ]（誄曰）嘉永 4：ルイニイハク 安政 4：ルイイハク 文久 3：ルイニイハタ、 [28 オ]（沮之）嘉永 4・文久 3：ハダムコ

レヲ 安政 4 振り仮名無し、[30 オ] (浩然之氣) 嘉永 4・文久
3 : コウセンノキ 安政 4 : コウゼンノキ、[42 ウ] (乗矢) 嘉永
4・文久 3 : シヤウシ 安政 4 : ジヤウシ

という具合で、この文久 3 (1863) 年版は、刊行年の近い安政 4 (1857)
年版ではなくて、その前の嘉永 4 (1851) 年版の翻刻と認められる。

(6) 改正四書字引

表紙：鳶色地紙に花菱模様空押し。(題簽) 表紙左肩、単枠付淡黄色紙、
〔後藤／改正〕四書字引 略註〕。(封面) 様式は (1) ~ (5) までの諸本
に同じ。書名は〔堅本〕四書字引大全〕。右・左の欄に記す凡例的なもの
も同様式のものであるが、末に「千鍾房梓」の版元名、その下に「北島
千／鍾房章」の小型朱印を捺す。千鍾房は北島氏、須原屋茂兵衛の号であ
る。(刊記) 後表紙見返し匡郭内に「天保九戊戌初夏發行／明治二己巳季
夏三刻」と年記を出し、京都・勝村治右衛門、大坂・秋田屋太右衛門、東
京・岡田屋嘉七以下計 8 名の「三都書肆」を列記する。「江戸」が「東京」
になっているが、この 8 名は嘉永版以来のもので、変動は無い。なお、
頭書「抜萃略解」每半葉 8 行のイロハ分け標目は、これまでの版と異な
り陰刻となっている。

本文上の特徴からして、この明治 2 年版も嘉永 4 年版の翻刻と考えら
れる。

(7) 改正四書字引

表紙：栗皮色地紙に花紋・唐草・紗綾形模様空押し。(題簽) 単枠付短
冊形黄紙。〔後藤／改正〕四書字引 略註〕。(封面) 〔堅本〕四書字引大
全〕。書名の左右に嘉永版以下の諸版と同じく凡例的なものを記す。刷良
し。6 行 5 段、封面 + 49 丁。嘉永版系であるが (6) までの諸版とは異
なる。〔近世末・明治初期〕刊。

(8) 改正四書字引

袖珍本 1 冊。表紙：栗皮色地紙に紗綾形模様空押し。(1) ~ (7) 本よ
り一回り小さく、一本によれば縦 10.2、横 7 糎。(題簽) 単枠付短冊形白
紙、「四書字引 全」。(刊記) 後表紙見返し匡郭内。「安政二卯年冬新刻／

西村屋與八原版／江戸書林・馬喰町貳丁目 山口屋藤兵衛板」。〔封面〕匡郭内を界線で縦に 3 ッ割り。中央に「〈改正〉四書字引大全」と書名を出し、その左右に天保版、嘉永版等と同様に凡例的なものを載せるが、

〔本書〕：世ニ流布スル所ノ↔天保、嘉永、明治 2 年版：世ニ流布ノ

〔同〕：ヨツテ改正ス↔天保、嘉永、明治 2 年版：コレヲ改正ス

〔同〕：大學ニテハ○、論語ハ△、孟子ハ⊗、中庸ハ□↔天保、嘉永、明治 2 年版：大學ニテハ●、論語ハ▲、孟子ハ✕、中庸ハ■

の如き異同がある。(柱刻) 上から「四書字引」、魚尾、丁付、陰刻で「永壽堂」とある。永壽堂は刊記に言う西村屋與八の堂号である。本文 5 行 7 段、封面 + 42 丁 + 奥付。(1 画) 一～(29 画) 鬱、2413 字。頭書は無し。

(9) 改正四書字引

表紙：葡萄茶色地紙に紗綾形模様空押し。(題簽) 子持ち枠付紫色紙。「〈改正〉四書字引 後藤點 全」。〔封面〕匡郭内を界線で縦に 3 ッ割りにし、中央に「〈改正〉四書字引 全」と書名を大きく出し、右に「後藤點」左に「東都 萬榮堂發閱」。(内題)「改正四書字引」。頭書無し。本文 5 行 7 段、封面 + 1 + 41.5 丁。(1 画) 一～(29 画) 鬱。刊記・尾題無し。(柱刻) はじめに魚尾、次に「四書字引」、丁付(一～四十二)、その下に界線。初丁は「四書字引序」とあり丁付は無い。初丁の〔序〕は「世ニ流布スル所ノ四書字引、多シトイエドモ」云々に始まる凡例的なもので、「大學ニハ●印ヲ付、論語ニハ▲」といった引用合文も示す。

(10) 改正四書字引大全

表紙：葡萄茶色地紙に紗綾形模様空押し。(題簽) 灰青色地紙に子持ち枠。「〈改正〉四書字引大全 全」。(内題) (目録題)「改正四書字引大全」。(刊記) 後表紙見返し貼付の終丁オに本文 3 行分があり、界線を置いて左に「改正四書字引大全終」と尾題があつて、その左脇に「嘉永五壬子年再刻／大坂書林 河内屋喜兵衛」と記す。(封面) 重線で豎に 3 ッ割り。中央に大きく「〈改正〉四書字引大全」と書名を出し、右に「引用合文」と

して「大學●、論語▲、孟子✕、中庸■」の記号、左に「書肆 積玉圃梓」と版元名を示す。積玉圃は河内屋喜兵衛の堂号である。(柱刻) 上部に魚尾、次に「四書字引」の書名、下に丁付(一~四十)。目録には丁付無し。5行7段、封面+1+39丁+奥付。(1画) 一~(31画) 麤。

なお、山田忠雄氏によれば、寛政4年・正本屋吉兵衛刊、39丁、5行7段本がある由であるが、未見。

【G】

(1) 改増四書字引大鑑

袖珍本1冊。表紙：水色地紙に花亀甲紋空押しのものや、紫色布目地紙に亀甲・輪違い模様空押し、紫色地紙に紗綾・花紋空押しのもの等がある。これもやや小ぶりのものが普通で、一本によれば縦10.75、横7.55糎。(題簽) 表紙左肩、子持ち杵付短冊形白紙、「〈嘉永改刻〉四書字引 完」。(目録題)「改増四書字引大鑑」。(内題) 無し。(刊記) 後表紙見返し匡郭内に「嘉永四年亥秋再刻 皇都書林 舛屋勘兵衛」とあり。(尾題)「改増四書字引大鑑終」。(柱刻) 上方に「四書畫引」、○を置いて下に丁付(目録、一~四十五)。5行6段、1+45丁+奥付。本文：(1画) 一<イツ、ヒトリモ、ヒトタビ、ヒトツ、ハジメ>~(廿五卅一画) 麤くソ、アラシ)。2531字。一本の袋には、子持ち杵を縦に3ツ割りにし、右から「嘉永新刻／〈改正〉四書字引／皇都書林 舎梓」とあり、書肆名が削られた痕跡がある。

【H】

(1) 〈増補畫引〉全備四書字引

表紙：深縹色地紙に紗綾形模様空押し。(題簽) 子持ち杵付短冊形黄紙、表紙左肩、「改補四書字引大全」。(目録題)「改補四書字引大全」、(尾題)「四書字引大全終」。(刊記) 終丁42ウ~後表紙見返しにかけて「大成正字通」「補正初學指南鈔」「千字文國字解」「〈急用間ニ合〉真字引玉篇大成」といった、いずれもこの時期吉文字屋が力を入れて宣伝していた4点の

著作の、内容案内付広告があり、末に界線を置いて「寛政三辛亥年十月日／大坂心齋橋南四丁目／吉文字屋市兵衛」と記す。(柱刻) 上方に「四書全備字引」、下方に丁付 (一～四十二)。封面、目録、奥付には丁付無し。

5 行 7 段、1.5 + 42 丁 + 奥付。42 オまで本文。(封面)「附言」と題し

四書字引世ニ多シトイヘトモ、音訓トモニ正シカラズ、是ニヨツテ舊本筆畫ノ差ヲ改メ、音訓ノ謬ヲ正シ、新ニ數十字ヲ増益シ、平仄唐音ヲ附シ、一書ノ大備ヲキワムルコトシカリ

と記す。また、目録のある丁 (柱刻：四書全備字引凡例) のウには、「引ニ出ガタキ字ハ、其畫ノ前後ヲ見合引ベシ、少シク其例ヲ記ス」云々の凡例がある。【C】の「増益四書字引大成」系の本文で、付訓が多い。(1 画) 一～ (29 画) 罫。

【I】

(1) 校正四書字引大成

表紙：香色地紙に小菊紋空押し。縦 10.95、横 7.95 糎。(題簽) 子持ち枠付短冊形白紙。「新鐫四書字引」。(扉) 飾り枠内を界線で縦に 3 ツ割りにし、中央に「四書字引」と書名を大きく出し、右左上部に「新板／校正」下部に「道春／闇齋」と記す。ウは「引如字書」(ヒクコト字書ノ如シ) として字画の目録と簡単な凡例を示す。(内題)「校正四書字引大成」。(刊記) 後表紙見返し貼付の終丁オ本文末に尾題「校正四書字引大成終」を置いて、界線を引き左方に「天明二年壬寅孟春穀旦／武江書林 日本橋南壹丁目・須原屋茂兵衛梓」と記す。(柱刻) 白口、上部に「四書」、下部に▲を置いて丁付 (初、一～卅三)。



本文 6 行 7 段、(1 画) 一～(29 画) 鬱。2415 字。【C】本系で付訓が多い。1 + 33 (32.5) 丁。

(2) 校正四書字引大成

表紙：香色地紙に紗綾形模様空押し。(題簽) (1) と同様式。(扉) 子持ち枠内を縦に 3 ツ割り。中央に題名「四書字引」、右左に、上部に「道春點／闇齋點」、下部に「新版校正／千鍾房發」と記す。千鍾房は須原屋茂兵衛の堂号である。内題・目録・柱刻・尾題等、(1) に同じ。(刊記)「文政七年甲申仲秋再刻／東都書林 日本橋南壹町目・須原屋茂兵衛梓」。

(3) 校正四書字引大成

表紙：栗皮色地紙に紗綾形・花紋空押し。(題簽) 子持ち枠付短冊形白紙、「大全四書字引(破欠)全」。(封面)「校正四書字引大成目録」。(内題)「校正四書字引大成」。(尾題)「校正四書字引大成終」。(刊記)後表紙見返し匡郭内左方に「書林 大坂心齋橋南壹丁目・敦賀屋九兵衛」と書肆名のみある。(柱刻)下方に丁付(一～四十一)のみ。5 行 7 段、目録 + 41 丁 + 奥付。

(4) 校正四書集註字引

表紙：栗皮色地紙に紗綾形模様空押し。(題簽) 子持ち枠付短冊形黄紙、「〔後藤／先生／定點〕四書集註字引」。凡例を記している封面の題名も同じ。(内題)「校正四書集註字引」と小さめに記し、その下に「草野肇」と大きく出し、またその下に「編輯」と小さめに記す。(尾題)「校正四書集註字引終」。(刊記)後表紙見返し匡郭内に「明治十七年三月廿五日求版御届／編輯人 東京府平民・草野 肇／出版人 東京府平民・安田恒太郎」とある。(柱刻)下方に丁付(一～十八、十九ノ廿九、三十～三十六)のみ。7 行 8 段、封面 + 26 丁 + 奥付。

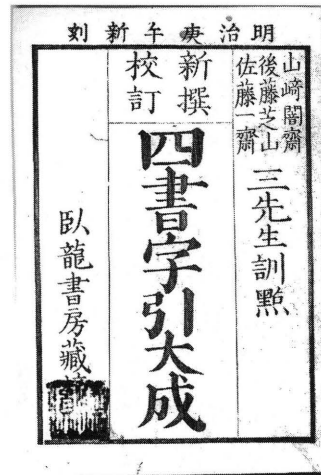
IV

【J】

(1) 新撰校訂四書字引大成

小本 1 冊。表紙：栗皮色地に紗綾形模様空押し。縦 15.65、横 11.4 糎。

(題簽) 子持ち粹付、表紙左肩、
 「〈新撰／校訂〉四書字引大成
 全」。(内題)「新撰校訂四書字引
 大成」。(封面) 上欄外に「明治庚
 午新刻」とヨコに出し、粹内を罫
 線で縦に 3 つ割りにして、右か
 ら「山崎闇齋／後藤芝山／佐藤一
 齋 三先生訓點／新撰校訂／四書
 字引大成／臥龍書房藏梓」と記す。
 (尾題)「新撰校訂四書字引大尾」。
 (刊記) ナシ。但し封面の記述か
 ら明治 3 (1870) 年の刊であるこ



とが判る。(柱刻) 黒口、魚尾、重線を置いて下方に丁付。(丁付) 一、二、
 一、二～四十五。6 行 7 段、封面 + 2 (凡例、總畫引目次) + 44. 5 丁。
 (本文) (一画) 一～(廿四ノ九) 鬱、2489 字。「凡例」に

一、今世ニ専ラ行ハル、四書字引多シ〔ト〕雖トモ、謬誤互ニアツ
 テ児童惑ヒヤスキカ故ニ、今諸本ニ就テ其粹ヲ拾ヒ改撰シテ新撰校訂
 四書字引大成ト号ス

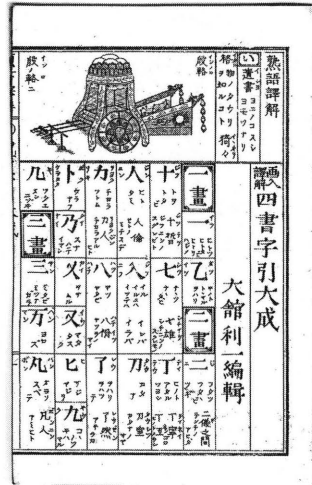
一、字ニ数音数義アリト雖モ今省シテ悉ク載セス、只其四書中ノ訓點
 ニ関係スルモノヲ詳ニ載セ、童蒙ノ相(テヒキ)トナス、其全キヲ見
 ント欲セハ、字林玉篇ニ就テ索(モト)ムベシ

云々とある。その訓が各々の書に独自のものである場合は、□の中に書名
 の略号：大・中・ロ・子を入れた記号を其訓の頭に付し、示してある。こ
 れは【F】(1)「改正四書字引」天保 8 年版あたりからの工夫を受け継ぐ
 ものである。なお、ここに言う「字林玉篇」とは、江戸時代後期に盛ん
 に行われた横本 1 冊の部首別・画引きの単字字典で、本書に近い時期のも
 のとしては、嘉永 5 (1852) 年版または安政 7 (1860) 年版の「〈新刻訂正〉
 新增字林玉篇大全」、安政 3 年版の「〈新鑄校正〉増補字林玉篇大全」が
 あり、それらを指しているものと考えられる。

(2) 〈画入譯解〉四書字引大成

大館利一編、袖珍本・銅版 1 冊。①表紙：栗皮色布目地紙に紗綾形模様。(題簽) 重子持ち枠、短冊形白紙。〔〈画入譯解〉四書字引大成 大館利一編輯 全〕。(封面) 飾り枠付。

〈イ〉桃紅色紙に黒で印字、〈ロ〉白紙に朱で印字。中央に「〈画入譯解〉四書字引大成」と書名を出し、右に「後藤芝山定本／大館利一編輯 定價十二錢五厘」、左に「大阪 合書房蔵」とあり。(内題) 「〈画入譯解〉四書字引大成」、次行に「大館利一編輯」とある。(柱刻) 「頭書譯解・四書字引大成」、○を置いて下方に丁付。凡例には書名無く、卷末の「孔子及七十二弟子略傳」は「孔子及弟子



解]、「弟子解」とあり。(丁付) 凡一、一～四十、附一～三。(刊記) 後表紙見返し子持ち枠匡郭内、右から「明治十三年六月御届 定價十二錢五厘／編輯人 大阪府平民・大館利一／出版人 全府平民・大野木市兵衛／發兌人：中島徳兵衛・森本専助・北村宋助」。(尾題) 「〈画入譯解〉四書字引大成」。(凡例) 明治十三年六月、編者識。本文：8 行 3～5 段、1 + 40 + 3 丁、(1 画) 一～(28 画) 鬱、2529 字。頭書：「熟語譯解」。イロハ順。い・遺書くヨニノコスシヨモツ也) ～す・芻豢くスウクワン：イヌ・ブタ・ウシ・ヒツジヲ、草ヤモミデヤシナヒカフコト) 669 項。

②表紙：〈イ〉黄色布目地紙に紅色紙題簽、〈ロ〉黄色地紙に紗綾形模様空押し、題簽は白紙。様式は①に同じ。(封面) 〈イ〉無し、〈ロ〉青色刷。様式は①に同じ。「孔子及七十二弟子略傳」は卷頭にあり。①とは異版。

なお、大館利一には①と同じ様式の「〈画入／譯解〉五經字引大成」(明治 13 年 9 月 15 日御届、出版人：大阪岡田茂兵衛・森本専介・岡仙線

助・松村九兵衛) 袖珍銅版 1 冊がある。

(3) 〈鼈頭訓解挿畫〉四書字引

袖珍本・銅版 1 冊、小島鎬吉編。表紙：〈イ〉は栗皮色地に紗綾形模様空押し、〈ロ〉は黒色布目地紙に網目模様空押し。(題簽) 子持ち柀付短冊形白紙。「〈鼈頭／訓解／挿畫〉小島鎬吉編輯／四書字引 全」。(刊記)

後表紙見返し。「明治十三年十一月

廿四日出版御届 定価十二銭／

編輯人東京府平民・小島鎬吉／出

版人 東京府平民・永岡新助／發

兌人 東京府平民・木村文三郎」。

(尾題)「〈鼈頭訓解挿畫〉四書字

引終」。(封面)〈イ〉紅刷、〈ロ〉

黒刷。(柱刻)「四書字引」、下方

に丁付。丁付：一～三十。「凡例

(明治十三年十一月、編者識)」は

「四書字引 凡例」とのみあり丁

付無し。頭書は大學熟語、中庸熟

語、論語熟語、孟子熟語に分けて

ありイロハ順ではない。本文 8 行 7 段、(1 画) 一～(30 画) 鸞。1 +

30 丁+奥付。なお、「凡例」に「文字ニ依リテ讀クセアリ、大學ハ■……

孟子ハ▲」とあるが、これは【F】(8) 安政版「改正四書字引」や(9) 嘉

永版「改正四書字引大全」のそれを参考にしているものと考えられる。

(4) 四書字引

小本・銅版 1 冊、原田由己編。表紙：栗皮色地に紗綾形・花紋空押し。

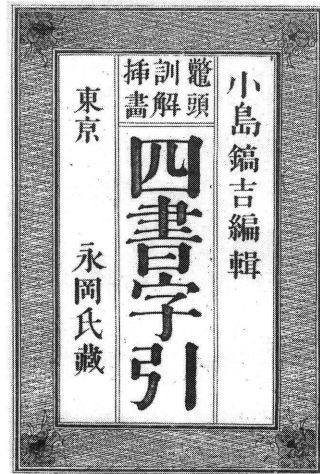
(題簽) 子持ち柀付短冊形白紙。「〈原田／由己／編輯〉四書字引大全 完」。

(刊記) 後表紙、子持ち柀内に「版權免許明治十四年二月五日」と年記を

出し、界線を置いて左に「編輯人 東京府士族・原田由己 神田區小川町

壹番地、出版人 同平民・篠崎才助 日本橋區下槇町七番地」と記す。

(封面) 茜色紙、子持ち柀内を重線で縦に 3 ツ割り。中央に「四書字引大



全」と書名を大きく出し、右に「原田由己編輯」左に「版權免許 萬蘊堂發兌」、上欄外に右から「明治十四年二月新鐫」と記す。(内題)「四書字引」、次行に「原田由己編輯」と記す。(尾題)終丁ウ最終行に「四書字引終」、下方に「安藤潤書」とある。

本文 6 行 [7] 段、1 (四書字引小引：明治十三年天長節後一日、原田由己識) + 2 (例言) + 3 (部類次叙) + 69 丁 + 奥付。(1 画) 一～ (24 画至 33 画) 鬻。3547 字。付訓も多いが、原著からの用例の提示が多いのが特色である。例えば「一」はイツ、イチ、ヒトツ、ヒトヘニ、カズ、モツバラ、ハジメ、ヒトりの訓のほか、大學では「一人貪戾」(君一人ガムサボリテミチニモトルトキハ) 等 3、中庸で 3、論語では「一簞食」(イヒカゴニーパイノメシ)「一瓢飲」(ヒサゴーパイノノミモノ) の 2、孟子では単独に 9、論孟で 2 例原文を引き解釈を付している。なお「例言」に「此書ニ収載シタル文字ハ。四書本文ノ外。朱子ノ註ニ用キタル文字。及ヒ序文ニアル所ノ文字マデモ。漏レナク編入シタレバ。凡ソ讀ガタキ文字ハ。總テ此ニ索テ其音訓ヲ知ルヘシ。」とある。

(5) 〈挿画〉四書字引大全

小本・銅版 1 冊、阿部為任編輯。表紙：黄色地紙に紗綾形模様空押し。縦 15.1、横 10.09 糎。(封面) 赤紙。四周双边匡郭を界線で縦に 3 ツ割り。「阿部為任編輯／〈頭書略解〉〈挿畫〉四書字引大全 完／共立舎藏版」。(内題)「〈挿画〉四書字引大全阿部為任編輯」。(刊記) 後表紙見返し単枠内。「明治十四年五月廿三日出板御届／同 五月三十日發兌／編輯兼出板人 東京府平民・阿部為任／發兌書肆 同・矢野新造」。終丁と奥付の間の丁に東京・北畠茂兵衛～下野足利・川島一三郎に至る 60 軒の「發賣書肆」を列記する。(尾題)「四書字引終」。(柱刻) 魚尾、〈挿画〉四書字引、丁付。本文 8 行 5 段 3 + 39 + 1 丁 + 奥付。(1 画) 一～ (29 画) 鬱。2424 字。

「〔鼈頭〕略解」あり、凡例(明治十四年辛巳五月編者識)に
鼈頭ハ畫數ヲ區別シテ熟字ヲ輯メ、略解ヲ附シ、又童蒙等二解シ難キ
部分ハ、挿画ヲ以テ其物品ヲ示ス

とある。(1画)一以貫之～(29画)鬱陶。また、鼈頭末に「虚字要解」(嘗～況矧、110字)を付す。「凡例」に「大學ハ●、論語は▲」等の引用合文、扉絵、題辞、「挿畫四書字引大全序」(漢文体、明治辛巳三月 貝崖宮原確撰)あり。

(6)〈挿画〉四書字引大全

小本・銅版1冊、笹本仙洲編。(刊記)「明治十四年十一月九日出版御届／編輯人・笹本仙州／出版人・富田彦次郎／發兌書肆 東京・東崖堂」。管見に入ったものは封面は欠のため未詳であるが、他は扉絵・60軒の発賣書肆を含めて(5)と同様式。但し、内題下の編者名を改め、鼈頭の題に「之部」の2字を加えているほか、鼈頭欄に空きがある場合には、新たに項目や挿画を付け加えたり、振り仮名を増やしたりしている。例えば7オ2行目～4行目にかけて「十萬、右師、平陸、行人、未可也」を入れているが、「十萬」は1行目の「甲」から続くもので、こうあるべきと思われる。すなわち本書は(5)の補訂版と見るべきものである。因みに鼈頭は34画までである。

【K】

(1) 四書字引〈イ〉

横本3ツ切1冊。表紙：濃縹色無地紙。縦8.1、横17.7糎。(題簽)単棹付短冊形白紙。「四書字引 完」。(内題)「四書字引」。(刊記)後表紙貼付の終丁オ本文末に界線を置き左方に「天保七丙申歳／四月求板／江戸書林／兩國吉川町・文會堂山田佐助」と記す。(柱刻)上方に「四書」、下方に魚尾を置いて丁付。丁付：一～三十一。終丁には柱刻無し。本文10行4段、(1画)一～(29画)鬱、2345字。31.5丁。*〈ロ〉本と同一板木であるが刷やや良し。

(2) 四書字引〈ロ〉

横本3ツ切1冊。表紙：栗皮色地紙に亀甲紋空押し。(題簽)「掌中四書字引 全」。*〈イ〉と同一板木であるが刷劣る。

(3) 増補四書字引大全

横本半紙本 3 ツ切 1 冊。表紙：栗皮色地紙に紗綾形模様空押し、縦 7.2、横 15.6 糎。(題簽) 子持ち枠付黄紙または白紙。「大全増補四書字引大全



完)。(封面) 子持ち枠内に右から「増補四書字引」。(内題)「増補四書字引大全」。(刊記) 終丁ウ匡郭内に「天保七丙申年／四月求板／萬延元庚申年／増補再板／兩國吉川町・山田佐助原板／同・山崎屋清七板」。(印)。後見返しに京都・勝村治右エ門、大坂・河内屋喜兵衛、河内屋茂兵衛、尾張・永樂屋東四郎、江戸・須原屋茂兵衛～山崎屋清七まで 16 名の書肆名を挙げる。(柱刻) 魚尾を置いて下に「四書」、下方に丁付。丁付：一～四十三。本文 (1 画) 一～ (29 画) 鬱。10 行 4 段、封+ 43 丁+後見返し。

(4) <道春點後藤點> 増補四書字引大成

横本 3 ツ切 1 冊。表紙：赤茶色字紙に紗綾形模様空押し。縦約 8.5、横 18.15 糎。安政 4 (1857) 年 3 月、萬屋忠藏刊。

<イ> 小川民徳著「新增四書五經字引」

小川民徳著の「<道春點/後藤點> 増補五經字引大成」(11 行 4 段、63 丁) と合冊にし、題簽を「新增四書五經字引 全」としたもの。「四書」は (内題)「<道春點/後藤點> 増補四書字引大成」。(刊記) 終丁ウ中央付近に「安政四年丁巳三月／小川民徳著」、左に「芝飯倉五丁目／東都書肆萬屋忠藏梓」とあり、後見返し匡郭内に信州善光寺・小枡屋喜太郎、大坂・秋田屋太右衛門、河内屋茂兵衛、尾州・永樂屋東四郎、江戸・岡田屋

嘉七、和泉屋吉兵衛、和泉屋金右衛門、山城屋佐兵衛、山城屋新兵衛の9名の書肆名を挙げる。(柱刻) 上部に「四書」、魚尾を置いて下方に丁付。叙は「序」と魚尾のみ。丁付：一～三十九。丁数 1 + 39 丁 + 後見返し。本文：(1画) 一～(29画) 鬱、11行4段、2412字。漢文体「叙」(安政四丁巳年春三月小川式民徳撰)に「山崎美成所編小冊子。多據康熙字典。輯其切日用者。以便童蒙。惜其業不卒。書肆齋來其書。乞考訂。就閱之。與余意暗合。因增補其脱漏。正其錯謬。以繼美成之志耳。」云々とあり。四書字引単独版の存在が想定されるが未見。

〈ロ〉赤羽郡治良著「増補四書字引大成」

表紙：赤錆色地紙に紗綾形模様空押し。(題簽) 子持ち枠付短冊形白紙。「増補四書字引大成 全」。(内題)「〈道春點/後藤點〉増補四書字引大成」。(刊記) 終丁ウ右方に「安政四年丁巳三月/赤羽郡治良著」、間を大きく空けて左に「芝飯倉五丁目/東都書肆 萬屋忠蔵梓」と記し、後見返しに〈イ〉と同じ9名の書肆を列記する。本文は〈イ〉を1部分補刻したものが。注記の表記等に小異あり。叙は小川式民徳で変わらず。

〈ハ〉〔新增四書五經字引〕

「〈道春點/後藤點〉増補四書字引大成」「〈道春點/後藤點〉五經字引大成」とも、著者名赤羽郡治良。(刊記) 終丁ウ、右方に寄せて「安政四年丁巳三月/赤羽郡治良著」と出し、「四書」は間を大きく空けて左方に「芝飯倉五丁目/東都書肆 萬屋忠蔵梓上記」と記す。「五經」は萬屋の方も右に寄せ、2行程空けて左に、須原屋茂兵衛、須原屋新兵衛、須原屋佐助、須原屋伊八の4名の江戸書林と、奥州仙臺の伊勢屋半右衛門の名と住所を列記し、さらに後見返しに〈イ〉と同じ9名の書肆を出す。叙は小川式民徳のままである。〈ロ〉の翻刻版か。

(5) 〈道春點後藤點〉増補四書字引大成

袖珍本・銅版1冊、吉田庸徳編。表紙：濃紺色布目地紙に網目模様空押し。(封面) 子持ち枠付き黄紙を界線で縦に3ツ割りにし中央に「四書字引 全」と大きく出し、右に「吉田庸徳編輯」、左に「東京書肆 富山堂蔵」と記す。(内題)「〈道春點/後藤點〉増補四書字引大成」。(刊記)

38 ウ匡郭内に右から「明治九年九月十六日御願／同年九月廿七日板権免許／同十年十一月十五日出生 定價十二錢五厘」と年記を記し、界線を置いて左に「崎玉縣士族・吉田庸徳／出版人 東京府平民・高木和助」と出す。また、奥付ウから新潟縣・中村作平～東京・金田彦造の1府13縣134名の書林を上下2段2丁分にわたり列記する。(尾題)「増補四書字引終」。(柱刻)上部に「四書」、下に界線を置いて丁付(一～三十九。叙および最終丁には無し)。本文7行8段、(1画)一～(29画)鬱。1+37+3丁。(叙)：漢文体、橙色刷。明治十年十一月 玉池隱士没光謹白。

*本書は(4)〈ハ〉安政4年3月赤羽郡治良著横本の翻刻と看做すべきものである。但し1オヤ1ウは、掲出字の順序を変え、註の表記を少し変える等の細工がしてある。別のものに見せかけるための所業である。

[L]

(1)〈改正〉四書字引

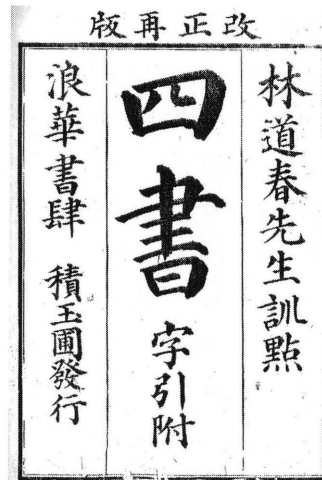
袖珍本・銅版1冊、堤大介編。表紙：香色無地紙。封面は破欠のため未詳。(内題)「〈改正〉四書字引」。頭書に「難字略解」あり。(刊記)終丁ウ匡郭内。「明治十一年十二月三日出版御届／明治十二年一月 出版發兌」。2重界線を置いて左に「輯者 高知縣士族・堤大介／出版人 大阪府平民・小谷卯兵衛」。左下欄外に「大阪靱永通二丁目三十一番地ニ於銅版師山本社中刀」とあり。(尾題)「四書字引終」。(柱刻)界線を置いて下に丁付(一～四十)のみ。扉・凡例には丁付無し。本文：8行6段。(1画)一～(28画)讎。2+40丁。「難字略解」は50音順。(ア)哀衿～朕載自毫。その後に「訓點并通例」あり。扉は綠色刷。オ「開胸臆(湯川亨題)」の上部に「四書字引」と右横書き、ウ盆栽の鉢に「明治十二年春／松雲山人」と記す。凡例(徳島・編者 堤大介)は赤色刷で「〈改正／畧注〉四書字引／凡例」と題し、「是迄世ニ公行セル字引、音訓ヲアヤマリ童蒙便ヲウシナフノ患アルヲ以テ、余改正シテ刊行セシモノナレバ、採用センコトヲ冀望スルモナリ」云々とある。また、オ右下欄外に「龍玉堂松雲銅刻」と記す。

以上管見に入った総画引・部首引の袖珍本・小本の「四書字引」を挙げて来たが、この手合いはまだある。最初のほうで言及した山田忠雄氏責任監修の「マイクロフィルム版国立国会図書館所蔵・明治初期辞書集成」目録（昭和 63.4）によれば、市岡正一「四書字引譯解」（同 12.8）、杏豊「〔新刻〕四書字引」（同 13.1）、籃沢敬一「四書字引」（同 13.7）等がある。フィルムは所詮フィルム。見てももどかしい思いが募る。原本を見ることが出来るまで、報告はしばし待ちたいと考える。

V

【M】

ここにもうひとつ挙げるべきは、四書本文の各冊巻末毎に字引が付されている例である。本書より前、松篁軒から刊行された「文化改刻／五經正文」や、文化 9（1811）年初秋に製本所：大阪・森本太助、森本仁助、森本直助から刊行されたその各冊末に字引が付されているものがあり、外題の副題に「字引附」と謳っているものがある。例えば 4 分冊の「易經」の第 1 冊には 541 字、第 4 冊には 219 字の総画引きの字引きが付されているが、それと同じく「四書」にも「字引附」を謳っているものがある。今、慶應義塾大学附属研究所 斯道文庫の高橋智氏御所蔵本によ



ると、判型は大本、栗皮色地に紗綾形・雲形模様艶出し表紙。「大學」の封面に子持ち枠を設け、その中を界線で縦に 3 つ割りにし、中央に大きく「四書 字引附」と書名を出し、右に「林道春先生訓點」左に「浪華書

肆 積玉圃發行」、上欄外に「改正再版」とあるもので、題簽は、子持ち
梓付短冊形白紙で「〈改正／再刻〉大學（中庸、論語、孟子）〈道春點／字
引附〉全（一、二……）」。

各冊卷末に有界 13 行 17 段（孟子は 16 段）
の総画引きの単字字典が 1、2 丁分ある。「大學」は（3 画）干：オイテ、
ユク、コ、ニ～（27 画）蠻：パンの 339 字、「中庸」は（3 画）凡：ハン、
ヲヨソ～（26 画）讒：ザンの 402 字、「論語」三（巻 6、7）は（4 画）
升：ノボリ～（27 画）驥：キの 358 字、「孟子」二（巻 3～6）は（3
画）丈：チヨウ～（29 画）爨：カシクの 594 字。掲載字数は少なく音や
訓の情報も少ないが、各冊毎に付されているのがミソで、外国語学習のた
めの教科書等の巻末に付されている辞典を思わせるものがあり、それなり
の有用性があったと推測される。残存部数は五経字引附に比して少ない。

積玉圃とは【F】(10) 嘉永 5 年版「改正四書字引大全」の個所でもふ
れたが、大阪・河内屋喜兵衛のことである。刊記は「孟子」第 4 冊（巻
11～14 を収載）にある。すなわち終丁ウ本文末に界線を置き、左に大き
く「積玉圃梓行」と出し、左に「天明七年丁未孟春初刻／安政五年戊午孟
春再刻／浪華書肆 心齋橋通北久太郎町・河内屋喜兵衛」と記し、さら
に後表紙見返し匣郭内に、京都・吉野屋仁兵衛、江戸・須原屋茂兵衛、山城
屋佐兵衛、須原屋新兵衛、岡田屋嘉七、和泉屋吉兵衛、和泉屋金右衛門、
岡村屋庄助、尾州・永樂屋東四郎、萬屋東平、菱屋藤兵衛、菱屋平兵衛、
大阪・河内屋喜兵衛板」と記す。天明 2（1782）年初刻とあるが、その時
点で字引附であったかどうかは未詳。なお、明治 15 年 3 月に東京・東生
鐵五郎から刊行された渡邊一信訓点「正（續）文章軌範」袖珍銅版 4 冊
は、題簽や封面に「附畫引要字集」と謳い、「續文章軌範」下巻末に「畫
引要字集」として 36 画までの単字を、有界 10 行 10 段で掲げている。
給：キフ、タマフ、ソナフ、タス、ニキハフ、ソナワル、悶：ホン、モン、
モダユル、フサガル、ワヅラハシ、イキトホル、ウレフなど、原本文の性
質もあるが、字引附の四書に比べて附訓が多いのが特色である。

さて、以下は、これまでのものと異なり、「字引」と謳っていても、画

引・部首引では無く、本文順のものである。これは明治期刊行の漢籍・和製の漢文体著作物、地誌、教科書類の参考書・安直本の特色の一つで、書型は中本もしくは袖珍本、銅版が多い。四書五経以外にも「唐宋八大家文」「文章軌範」「十八史略」「日本外史」「国史畧」等に、字引・字類・字解を謳うものが多く出ている。次にあげる(1)は江戸時代のものであるが、その先駆とでも言うべきものである。

【N】

(1) 四書字引捷徑

中本 1 冊。表紙：縹色布目地紙。(題簽) 単梓付短冊形白紙。「四書字引捷徑全」。(封面) 匡郭内を縦に 3 ツ割りにし、中央に「四書字引捷徑」と篆書体・陰刻で書名を出し、右に「甲斐蜂城先生著」左に「信川堂藏」と記す。(内題)「四書字引捷徑」、左に「甲斐・新川源與土容／天目源益之子謙 閱、蜂城伴希真修之／琴河池正俊子鶴 輯校」と列記。(刊記)〈イ〉終丁ウに「文化十年癸酉十一月／門人・鷲水源成之、涼州源成真、荊園楠喬、蘭谷林有之 發行／男・伴真清、伴平章 蔵版」。他に〈ロ〉後表紙見返し匡郭内に、「〔今體〕宋詩選、西湖竹枝、今四家絶句、宋三家詩話」の 4 点の広告を出し、左に「文政七年甲申購板／江戸書林 日本橋通二丁目 玉山堂・山城屋佐兵衛」とある後印本がある。(柱刻) 上部に魚尾、下に各書名、界線を置いて下に丁付。序・凡例には丁付無し。論孟については当該丁のオモテ上部に篇名を出す。有界 8 行 7 段、5 + 81 丁。文化甲戌之冬・篁園野邨温 (漢文体) 序。凡例に



篇旁畫数ニカカハラズ、大學ノ始メヨリ孟子ノ終リニ至マデ、童蒙ノ讀ガタキ文字ヲ次第二出シ、朱熹集注ニヨリ、反切・音義・清濁ヲ正シ

とあり、単字を中心に音訓等を示す。なお、「道春點讀書本ノ紙貝」を底本として、陰刻で丁数を示してあるが、「然レドモ、其書ニヨリテ違フトト有ベシ、因テ其前後ヲ見ルベシ」とあるのは親切心か。

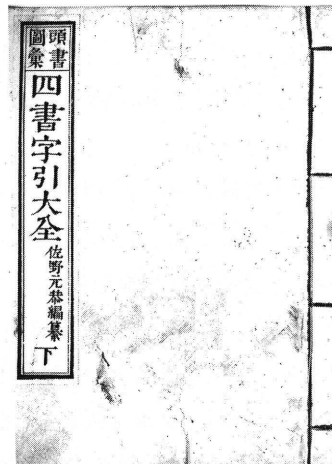
(2) 四書字解

中本 2 冊、西山柳太郎編。表紙：黄色布目地紙に花紋空押し。(題簽) 子持ち枠付短冊形白紙。「四書字解 學庸論部 (孟子部)」。(封面) 黄紙、縦 3 ツ割り。中央に「四書字解 全」、右に「西山柳太郎編輯」左に「明治十二年九月 / 廿四日版權免許 松林堂發兌」。編者名下に「定價六拾錢」の朱印。(内題)「四書字解卷上 (下)」、左下に「東京 西山柳太郎解」。(尾題)「四書字解學庸論部 (孟子部) 終」。(刊記) 下巻終丁「明治十二年九月廿四日版權免許 / 同十月十二日出版」、界線を置いて左に「編輯人 東京府平民・西山柳太郎 / 出版人 同府平民・三浪幸兵衛、同府平民・水野慶次郎」。(柱刻) 上部に「四書字解」、魚尾を置いて下オに篇名、界線を置いて下に丁付。卷頭附圖 4 丁分のみ銅版、原本文順、有界 8 行、はじめに「孔子七十二弟子解」あり。

〈上〉學庸論部：1 + 4 + 3 + 78 丁、〈下〉孟子部：85 + 1 丁。

(3) 〈頭書圖彙〉四書字引大全

中本・銅版 2 冊、佐野元恭編。表紙：黄色地紙に紗綾形模様空押し。(題簽) 子持ち枠付短冊形白紙、「〈頭書圖彙〉 / 四書字引大全 佐野元恭編纂 上 (下)」。(封面) 紅葉色紙、縦 3 ツ割り。中央に大きく書名、右に「佐野元恭編纂



“千里必究”、左に「大阪書林・吉岡氏蔵版」。(内題)「四書字引大全大學之部(中庸之部、論語之部、孟子之部/紀伊・佐野元恭編纂)」。 (中庸以下は「編輯」。「紀伊」の2字無し)。(尾題)「四書字引大全序文畢(大學<論語>之部終、中庸之部畢)、四書字引大全大尾」。(刊記)下巻終丁ウに「明治十四年六月六日出版御届/同年八月刻成發兌 定價金四拾錢」、左に「編輯人 和歌山縣士族・佐野元恭/出版人 大坂府平民・吉岡平助」。(柱刻)上部に「四書字引大全」、魚尾を置いて下に部名あるいは篇名、卷ノ上(卷下)、界線の下に丁付。本文有界 12 または 13 行。〈上〉[學庸論部] 2 + 11 + 51、〈下〉孟子之部 38 丁。

(4) 〈頭書挿畫〉四書字類大全

中本・銅版 2 冊、大賀富二編。表紙：黄色地紙に紗綾形模様空押し。(題簽)子持ち枠付短冊形白紙、「大賀富二編輯/〈頭書挿畫〉四書字類大全 上(下)」。(封面)紅色紙、縦 3 ツ割り。中央に大きく書名、右に「大賀富二編輯」、左に「東京 同盟書房蔵」とあり。(内題)「〈頭書挿畫〉四書字類大全卷之上(卷之下)」。上は左下に「大賀富二著」と記す。(尾題)「四書字類大全卷之上終」、「〈頭書挿畫〉四書字類大全畢」。(刊記)下巻後見返し匡郭内に「版權免許<明治十四年六月廿九日/同十一月出版」と年記を出し、界線を置いて左に「編輯人 熊本縣士族・大賀富二/出版人 東京府平民・内野彌平治、同・大倉孫兵衛、同・平川吉平衛」と記す。本文有界 12 行、扉絵 2 丁、凡例(明治十四年十一月編者識)あり。(柱刻)上部に書名、魚尾を置いて下に卷分け、題名・篇名、界線の下に丁付。〈上〉2 + 2 + 89、〈下〉54 丁。

(5) 〈頭書畧解〉四書字類大全

中本・銅版 3 冊、宮島純濼編。表紙：茶色地紙に紗綾形模様空押し。(題簽)子持ち枠付短冊形白紙。「〈頭書畧解〉/宮島純濼編纂/四書字類大全 學庸(論語、孟子)上(中、下)」。(封面)紅色紙、子持ち枠内縦 3 ツ割り。中央に書名を大きく出し、右に「宮島純濼編纂」左に「明治十七年/三月刊行 文求堂蔵版」と記す。上欄外に「版權免許」と右横書き。(刊記)下巻後見返し単枠内に「明治十六年五月十二日版權免許/同十七

年三月出版發兌 定價金五拾錢／編纂人 京都府平民・宮島純熙／出版人 京都府平民・田中治兵衛」とあり、界線を置いて左に河崎與十郎編「〈小學作文〉記事論説文範」全 2 冊の、内容案内付広告を載せる。本文有界 12 行、〈上〉学庸： 1 + 23、〈中〉論語： 37、〈下〉孟子： 45 + 1 丁。「凡例」に

聖賢ノ書ハ言簡ニシテ旨奥ク、少年子弟ノ豈容易ニ解シ得ル所ナランヤ、然レトモ卑キヨリ高キニ登ル若シ、能ク字句ノ義ヲ明ニシ、而シテ章意ヲ擇ネハ、思ヒ半ニ過キン、是レ以テ字類ヲ要スル所ナリ

云々とある。

この類では、他に谷喬の「標註四書字類大全」（明治 17 年 1 月刊）、河村與一郎の「〈鼈頭挿畫〉四書字類大全」（同 19 年 10 月）、榊原英吉の「〈鼈頭註釋〉四書纂語字類」（同 23 年 3 月）等があるが、未見。いずれ報告をしたい。

以上くだくだく紹介してきたように、四書に関する字引類は数多くある。そして、それは【A】(1) や【J】(2)、【K】(4)、【M】等で見たように、当然の如く五経とも強い関連を持つ。幕末から明治初期にかけて多く出された「名乗字引」の類にも、山本伊三郎編「〈掌中新選〉四書五經名乗字引大全」（題簽：掌中經書字引大成）明治元年序、折本銅版 1 帖があり、「文選字引」にも「〈四書五經〉」を角書に持つものがある。夙に元禄 11（1698 年）年孟春に出た古市興孝編の「經書字辨」小本 2 卷、その改題・改竄本の「經學拔錦國字解」（文化 5〈1808〉年刊）、さらには文化 6 年秋 9 月鎌田環斎の「經典熟字辨・四書之部」等にも触れねばならない。しかし今、紙数も大幅に超えてしまっている。いずれということで、煩雑にして蕪雑なこの報告を閉じたいと思う。